

心のかたち

ー金属糸を使ったくるむ行為によるジュエリー研究

東京藝術大学大学院美術研究科
工芸専攻彫金分野
学位番号 1322912
金希帥

| 要旨 |

糸は昔から人類の生活に密な存在であった。織物の主要な素材として用いられたり結び合と刺繍などの装飾行為にも利用され、多様な形態へと変貌させる。糸は現代においてはさらにその種類が非常に多様となっており、それぞれの素材ごとの特性や色感、質感を備えているため、現代美術の表現素材として多様なイメージを創造することが期待されている。また、アートセラピーとしても糸は精神の回復のための素材とされ、好ましい効果が期待されている。

本論文では、平凡な生活用品がどのように他者の感性にアピールするかについてを考え、糸の造形面における役割に注目する。糸は柔らかさ、温かいイメージを持つ素材であり、情緒のうえでの安心感を与える。また、糸による反復された行為によって二次的な造形効果を得ることができ、没入と満足感とともに精神の安定した回復にまでつなげることができる。

筆者は以上のような糸の特性を基礎として、本論は糸の感性、造形上の役割を銀による金属糸の素材に投影し、独自のコンテンポラリー・ジュエリー表現の探究を目的とする。

本研究の目的は、糸の造形上の効果を金属に応用した作品研究である。金属糸の特性、領域を広げ、金属固有の特性を生かすとともに、糸の柔らかさという表現の可能性を示すことにある。論文は、以下の4章から構成される。

第Ⅰ章と第Ⅱ章では、本研究が始まった背景と先行研究をもとに論じる。糸の使用と意味について述べ、芸術の素材として使うにあたって筆者の経験をもとに作品に用いた契機について述べる。あわせて、糸を反復的に包む行為と制作方法がどのように心の回復を描写するかの過程を考察する。

第Ⅲ章と第Ⅳ章では、博士後期過程中の作品制作過程と自作について論じる。特に本研究に使われた素材である銀、銀で作られた金属糸と制作道具、そして制作過程と出品作品における独自の表現方法と解釈について述べる。

最後に結論として内容を整理し、新たに試む筆者の研究制作の方向性と可能性を提示する。

研究内容は、糸という素材から得られた筆者の経験上の触覚と、記憶を土台に制作した博士提出作品、「心のかたち」のジュエリーシリーズを中心に論述する。本論の中心となる自作の概要は次のとおりとなる。まず作品制作に重要な素材である金属糸は、筆者の内面世界と記憶に込められた感情をつなぐ素材である。作品制作には、直径0.3mmの銀線を撚って作成した金属糸と銀板を使用する。銀を用いる理由は、その色調価値観にあり、そこには可能性、回復性、永遠性を投影している。

作品のモチーフは、レースのパターンと装飾の部分を再解釈することから始め、糸が特に密集した部分に重きを置いている。ことさら、自作には母のレースドイリーから多くの要素を求め、レースの密集した糸の部分と循環型図形の構造的特性を結びつけることで、「心」という抽象的な対象を表現する。円や楕円のような循環型図形は、感情の流れや回復過程を視覚的に示す重要なデザイン要素として機能する。金属板に穴を開け、金属糸を通過させる過程で模様を作り、金属糸が二本の線をねじりながら包み込むことで、滑らかな表面との対比が生まれ、質感の効果が強調される。特に糸が密集した部分に焦点を当て、「ニードルレース」技法からインスピレーションを得て、糸をぎっしりと編み込み形を作り出す。この過程は、人の心を強化し、感情の回復を促す表現方法へと繋がる。

全体の姿はジュエリー着用時、筆者の感情と内面を自然に表現できる機会を提供する。感情を視覚的に、また触覚的に伝える本研究の作品は、着用者が自分の内面的成長と回復過程を想起させ、心の回復力と強さを隠喩的に表わす。これを通じて単純な形態の表現を越え、感情と話を盛り込んだ個人的な象徴物になる。

本研究の主たる表現方法は、視覚的になじみのある糸を金属の素材に置き換えて使用した手工芸にも似た過程の集積である。金属糸を反復させつつ作るむ行為は、幸せな記憶を呼び起こすだけでなく、精神の傷を癒すための自浄でもある。金属糸を繰り返して重ねて作られる視覚、触覚、そして精神における効果を重要な前提とした「心のかたち」連作は、縁や隙間を金属糸でくるむ方法により、ともすると崩れやすい人の心を包むことを表現している。金属の鋭い部分を重ね、開いたところをつなぐ過程は、人が心を癒す方法と似ており、傷ついた感情をなだめるように、金属の上に金属糸を巻いて心理的な安定感を取り戻そうとしている。繰り返される行為と愛着によって回復した心の形態を造形的に具現化しているのである。

本研究を通じて、筆者は糸という素材が持つ感性と金属素材への応用を探求し、「心のかたち」というテーマに基づいて作品を制作することに取り組んだ。反復的な手仕事に込められた

感情的エネルギーを金属に投影することによって、感覚的な回復と安定を表現し、特にレースパターンに基づく「心のかたち」を銀の金属糸で具現化することにより、個人的な記憶や感情を表現し、心の回復と成長を象徴的に具現化した。「心のかたち」作品連作は、金属糸の反復的なくるむ行為を通じて精神的な回復の力を発揮し、芸術がどのように個人の感情的な経験や心の変化を表現することができるかを示している。この研究は、金属糸の可能性を広げ、より多くの人々に心の回復と安定をもたらす新たな表現方法を提案することを期待している。